

「葛藤裁判くキミのコト
がダイスキだからボクは
唄う〜。」

工藤 大嘉

登場人物

被告原告への過剰なストーカー行為によって訴えられた。原告と家が近所でよくスーパーでキュウリをを買うのを見ては妄想していた。

原告：被告によるストーカー被害者。精神的ストレスから煙草を吸い始め、肺ガンになり余命3か月を宣告される（吸ったのは一本だけ）本当に煙草が原因で肺がんになったのかは定かではないが、煙草を吸うきっかけを作ったのは確実に被告。

原告弁護士：原告に依頼された弁護士。原告のことがタイプで隙あらば肉体関係を築こうとする。

裁判官：長年この裁判所に務める爺さん今まで数多くの裁判を判決してきたベテラン。裁判でテンションが以上上がる。

証人：スーパーの店員で、野菜コーナーを担当。性欲が強く隙あらば肉体関係を築こうとする。

原告 ハトに石を投げている

原告 「私は生まれてこの方、人に愛されたことも人を愛したこともない、物事に興味や関心をあまり持たない女の子。社会がどうなるとか自分がどうしたいとか、そんなことわからない。そんなんだから毎日なにをしたらいいかわからず、暇を持て余しては、持て余した暇をまた持て余し、自分が生きている意味を考えては苦悩し考えては苦悩する毎日に苦悩しています。そんな中、私に興味を持つ男が現れました。他人に興味を持たない私だから他人に興味を持たれる事がなかった私はどうしたらいいかわからず、その興味が大きくなるたび私にストレスを与えました。そのストレスから私は煙草を吸いました。そしてら肺ガンになってました。そのついで私は肺ガンになりました。ははは。ありえねー。あー、なにやらどうにもよくわからない感情がどうにもよく分からなく私の中に渦巻いています。ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる、それを人は葛藤と呼ぶのでしょうか。なに言ってるかわかんない？知らねえよそんなこと…葛藤裁判：始めます。」

シーン 「裁判」

裁判官 「裁判だ裁判！裁判を行う！これより裁判を行う！ふはは！ふはははは！」

裁判官 「会場を走り回る

間

裁判官 「ああ、申し訳ない。テンションが上がってしまい取り乱してしまつた。それでは仕切り直そうか。」

裁判官 「まずはじめに言っておこう。私は型つ苦しいのが嫌いだね。難しい言葉を使うのが大嫌いだ。なのでみなさん、フランクにこうじゃありませんか。」

間

裁判官 「よし、それじゃあ裁判始めようか。裁判。裁判：裁判だ裁判！裁判を行う！これより裁判を行う！ふはは！ふははははは。」

裁判官 「再び会場を走り回る

裁判官 「ああ、申し訳ない。テンションが上がってしまい取り乱してしまつた。それでは仕切り直そうか。」

被告 「早く始めろ！」

裁判官 「死刑。」

被告 「はあ？」

裁判官 「死刑。お前もうあれだ、だめだな、うん、死刑。」

被告 「いや、うそ・・・」

裁判官 「はっはっは、ジョークだよジョーク。」

被告 「なんだこいつ。」

原告弁護士 「裁判官殿、そろそろ始めて頂けないでしょうか？」

裁判官 「それもそうだな、よしやろう。」

裁判官「それでは口答弁論やろうか。口答弁論。原告、前へ。」

原告 前へ出る

裁判官「原告の請求内容・主張の陳述…ああ、堅苦しい！君はなんで裁判を起したのかね？」
原告「私、原告は、被告による、ストーカー行為により…」

裁判官「ああ、堅苦しいあいつでいいよあいつ！ストーカーしたやつなんかあいつで十分だ！」

原告「私は、あのクソヤローによるストーカー行為により、多大なるストレスを抱え、喫煙を始め、肺ガンにかかり余命3か月を宣告されたため、あのクソヤローに死刑を求める。」
裁判官・原告「え？」

原告「私は、あのクソヤローによるストーカー行為により、多大なるストレスを抱え、喫煙を始め、肺ガンにかかり余命3か月を宣告されたため、あのクソヤローに死刑を求める。」
裁判官「あの、民事裁判で死刑は…」

原告「私は、あのクソヤローによるストーカー行為により、多大なるストレスを抱え、喫煙を始め、肺ガンにかかり余命3か月を宣告されたため、あのクソヤローに死刑を求める。」
裁判官「民事裁判で死刑にはできないよ…」

原告 泣く

被告「え？肺ガン？」

原告弁護士「大丈夫？」

原告弁護士 ハンカチを渡す

原告弁護士「はあ、可愛いな。」

裁判官「こちらの書類によるとストーカー被害により多大なストレスを受け日常生活に支障をきたしたため、慰謝料1000万を請求すると書いているが・・・」

原告弁護士「はい、そちらで間違いありません。」

原告「あんたのせいよ…全部あんたのせいよ。」

原告弁護士「抑えて！落ち着いて！可愛いな。」

被告「そんな、ボクはボクはただキミのことが…」

裁判官「静粛に！静粛に！落ち着きなさい！えー、確認だけど原告はクソヤローによるストーカー被害により…」

被告「ボクは…クソヤローじゃない…」

裁判官「静粛に！えー、原告はクソヤローによるストーカー被害により多大なストレスを受け日常生活に支障をきたしたため、慰謝料1000万円を請求する。間違いはないね？」

原告弁護士「はい、間違いありません。」

裁判官「私は原告に聞いているんだ。間違いはないかね？」

原告「…はい、間違いありません。」

裁判官「えー、それでは被告これに対して何か意見はあるかね？」

被告「ボクは…ボクはストーカーなんてしていない…ボクは彼女が心配で、遠くから見守

ってただけだ：ボクは彼女を守っていたんだ！」

原告「いつ頼んだ？！守ってなんていつ頼んだのよ！」

被告「そ、それは…」

裁判官「静粛に！私の許可なく物を言うな！私は裁判官だぞ！」

間

裁判官「えー、被告。彼女を守っていた？とはどういうことかね？」

被告「そのままだよ。ボクは彼女を守っていたんだ。」

裁判官「詳しく…」

被告「…どこから、どういえばいいか…」

シーン「スーパーヒーロー」

被告「ボクと彼女が初めて出会ったのは近所のスーパー。ボクは料理ができないから毎日そこでお弁当を買うんだ。夕方6時以降の安いやつを。」

被告「んー、どれにしようかな：安定ののり弁か：いや待てよ…たまには幕の内弁当でも食べようかな…」

原告 何か食材を探している

被告と原告 目が合う

被告「この時、僕の胸の奥がこう、キューってなったんだ！その時ボクは思った！これが人を好きになるってことなんだって！LOVE&PEACEってこういうことなんだって！」

裁判官・被告弁護人「きも…」

被告「それからボクは生きる意味を見つけた！ボクは引きこもりからスーパーヒーローに生まれ変わったんだ！」

被告 自前の戦闘服に着替える

原告弁護人「引きこもりだったのか。」

裁判官「きも…」

被告「彼女が通る道に転がっている石を寄せたり、彼女の自転車に毎晩空気を入れたりするようになった。ボクは誰かのために生きるってこんなに幸せなんだって気づいたんだ！

LOVE&PEACE--」

被告「だからボクはストーカーなんかじゃない。ボクは彼女のヒーローなんだ。」

裁判官「なるほどねえ。きもいなあ、続いて弁護人の口答弁論。原告弁護人前へ。」

原告弁護人 前へ出る

被告 被告弁護人と書かれたハチマキを頭に付ける

裁判官「おい、何をしている？被告？」

被告（齋藤まさる）「ボクは被告じゃない！被告弁護人のスーパーヒーローだ！」

裁判官「ああ、まあご自由に。」

原告弁護人「ヒーローねえ…勘違いも甚だしい。」

裁判「原告弁護人の主張だよ、どーぞ。」

原告辩护人「さっきから被告がおっしゃることは自分のストーリーカー行為を正当化しようとしているだけであって、普通に考えて明らかに原告のプライバシーを侵害している。それに今回の裁判で一番重要なのは原告がどれほどの精神的被害を受けたのが重要であって被告の気持ちなどは全く関係する余地がない。よって慰謝料1000万円を請求します。」

被告（ヒーロー）「異議あり！彼は純粹に彼女のことか！」

原告「異議あり！」

原告 原告弁護人を前へ出す

原告辩护人 とまどう

原告辩护人「彼は自分の汚い心を純粹という言葉を使い我々をまどわそうとしている！」

裁判官「え？そうなの？」

被告（ヒーロー）「異議あり！ボクは……」

原告「異議あり！」

原告 原告弁護人を前へ出す

原告辩护人 とまどう

原告辩护人「彼はボクなどという可愛らしい言葉を使い、自分が純粹であることを我々に主張しようとしている！」

被告（ヒーロー）「異議あり！」

原告「異議あり！」

原告 原告弁護人を前へ出す

原告辩护人 とまどう

原告辩护人「彼は……その……あの……ブス！」

被告（ヒーロー）「異議あり！それは今の話に関係ないし、ボクはブスじゃない！」

裁判官「静粛に！確かにブスではあるが今の話に関係ない。原告辩护人、口を慎みなさい。」

じゃあ改めてブスの意見を聞こうか。」

被告（ヒーロー）「ボクはブスじゃない。」

裁判官「それは今、関係ない！意見を。」

被告（ヒーロー）「ボクは、彼は彼女に悪影響を与えていない！あくまで彼女が喜ぶことをしているだけだ。慰謝料を払えって言うならボクは二つ返事で払う。だけど、ボクが彼女に悪影響を与えていたとは絶対認めない！」

原告「よくそんなことが言えたわね……」

問

原告「あなたのせいで私はガンになったのよ、もう死んじゃうの。分かる？」

被告「……本当に？」

原告「え？」

被告「本当に、ボクのせいでガンになったの？」

裁判官「確かに私も気になってはいたが、彼のストーカー行為によってストレスがたまり喫煙を始めた。それで肺ガンになった。」

原告「はい。」

裁判官「そんなすぐ肺ガンになるとは思えないが、一日何本吸っていたのかね？」

原告「2箱。」

裁判官「ほお。」

被告「確かに多いけど、たばこだけで肺ガンにはならないよ。」

原告弁護士「今の被告の発言は自分がどれだけ人に悪影響を与えているか認識できていない何よりの証拠です。」

原告「そうよ！あなたのせいで私は煙草を吸ったのよ！」

被告「当たり前のことを言っただけなのに。」

裁判官「静粛に！話が逸れてしまった。整理しよう。今回の裁判はストーカー被害による慰謝料の請求だ。実際、どのようなことがあったのか、証人に言ってもらおうか。それは証人、前へ。」

証人 寝ている

裁判官「証人？」

証人 目を覚ます

裁判官「出番だよ出番。」

証人「ああ、出番。」

証人と原告弁護士 目が合う

原告弁護士「あああ…」

裁判官「こちらの証人は原告がよく行くスーパーの従業員です。被告がどのような行為を行っていたのかを言ってもらおう。証人、被告はどのような様子でしたか？」

証人「…ああ、えーと…」

裁判官「シャキッとせい！いつまで寝てるんだ！裁判をなめるな！」

証人「…ああ、えーと…私の名前は小林静28歳、結婚しています。だけど最近、夫が全然相手をしてくれません。私は昔から性欲が強くて…」

裁判官「一体何の話をしているんだ！裁判をなめるな！」

原告弁護士「静粛に！」

裁判官・原告・被告「え？」

原告弁護士「昔から性欲が強くて…その先は？」

問

原告弁護士「ああ、私も昔から性欲が強くて…つい気になって…それで？」

証人「それで、私はスーパーのキュウリを見ては興奮する毎日に耐え切れなくなりました。なんでよりによって野菜コーナーを担当することになったのか、本当に不運でした。」

原告「今は何の時間なの？」

裁判官・被告「さあ？」

証人「何度も何度も店長に移動希望を訴えたのですが希望は叶わず、キュウリと格闘する毎日でした。」

原告弁護士「俺がキュウリになってやる！俺がこれからキミの…」

証人「そんな中、私の目の前にスーパーヒーローが現れたんです。」

証人 原告を指差す

劇中劇「キュウリ」

原告 スーパーで買い物をしている どのキュウリを買おうか迷っている

被告 原告の様子をものすごい形相で見ている

原告 見られている意識はあるが気にしないようにしている

証人「私ははじめ、彼が何を見ているのか見当もつきませんでした。だってとんでもない顔をしているんだもの！…それから彼の視線を追いました。」

原告「…そーねー…」

被告「なにがそーねーなんだ…何を考えているんだ??」

原告「あー、アー、んー。」

被告「んぐう、これはもしかしてよからぬ事を考えているのでは…いかん、彼女にそんなことはさせない！ボクが彼女を守るんだ！」

被告「すいません！」

証人「はい!?!」

被告「このキュウリ全部ください！」

証人「ぜ、全部ですか?!」

被告「はい！全部です！」

証人「か、かしこまりました。」

証人「この時、私はわかったのです。この人は私をキュウリの呪縛から救ってくれたのだと！一瞬だけでも私に救いを与えてくれたのだと！見ず知らずの人を助ける人が、スーパーなど行うもんですか！断言します！彼はストーカーなんかじゃない！スーパーヒーローです！…スーパーだけに」

原告「ふざけないで！さっきから黙って聞いてれば、好き勝手に言いやがって。わたしは…」

原告弁護士「本物のキュウリはどうか？」

一同「え?」

原告弁護士「俺のキュウリはどうか？」

証人「でも、だめよ。私には旦那というキュウリがあるのに、そんな…」

原告弁護士「じゃあこのまま、スーパーのキュウリを見て悶々と過ごすのか？」

証人「それは…」

原告弁護士「一番じゃなくていい、俺はキミの心の穴を埋める第二のキュウリになりたい

んだ！」

間

証人「本当にいいの？」

証人 原告弁護人のチンチンを握る

原告弁護士「ああ、構わない。同じキュウリじゃないか。」

証人・原告弁護士 ハケ

間

裁判官「いなくなっちゃったよ…」

原告「ちよつと、どこ行くのよ。」

原告 立ち上がり後を追おうとするが膝をついてしまう

被告 心配になり近づく

原告「近寄らないで！」

被告 固まる

原告「どいつもこいつも…ふざけやがって…あなた自分が何をしたか、わかってる？」

被告「ボクは…ボクはキミを守って…」

原告「自己満足もいい加減にして…ねえ聞いている？」

被告「…」

裁判官「はい。」

原告「おまえじゃねえ！」

間

原告「あなたの自己満足のせいで私は死んじゃうの？わかる？それともなに、私みたいな人間は死んでも別に構わないってこと？ねえ、ねえ？」

被告「そ、そんなこと…」

原告「あー、わかった。あなた、守ってる自分が好きなんですよ？誰かを守ってる自分がかっこいいんでしょう？違う？ねえ？」

被告「そんなことないよ！」

原告「じゃあ、何なの！」

裁判官「せ、静粛に。」

被告 手で裁判官を制する

被告「そんなんじゃない…そんなんじゃない…ボクはキミのコトがダイスキなんだ…ただ、それだけなんだ…」

間

原告「…じゃあさっさと1000万払って私の前から消えて。お願いだから。」

間

被告「平日の昼、ハトに石を投げつける。当たらなかったハトには印をつける。そして夜にはコンビニのアルバイトに行く。」

原告「え？」

被告「そして次の日の朝、印をつけたハトに石を投げつける。…淋しそうな顔をして…」

間

被告「本当にボクのせい？本当にボクのせいでキミは…」

原告「裁判官！今の言動からこいつのストーカー行為は明らかです！」

裁判官「んん。」

原告「裁判官！」

裁判官「…判決を下す…原告の勝ち！よって被告はなるべく早めに1000万を原告に支払うように！以上、解散！」

裁判官「もういや。」

間

原告「何にもないの。」

被告「え？」

原告「何にもないのがつらいの。」

被告「…」

原告「でも、もう本当に何も無くなるから。わたしは。」

間

原告「ねえ、私のどこがいいの？」

被告「…」

原告「顔？胸？お尻？そういう感じ？」

被告「そんなんじゃない！」

原告「じゃあ、なんで？」

間

原告「私は生まれてこの方、人に愛されたことも人を愛したこともない、物事に興味や関心をあまり持たない女の子。社会がどうなるとか自分がどうしたいとか、そんなことわらない。そんなんだから毎日なにをしたらいいかわからず、暇を持て余しては、持て余した暇をまた持て余し、自分が生きている意味を考えては苦悩し考えては苦悩する毎日に苦悩しています。そんな中、私に興味を持つ男が現れました。他人に興味を持たない私だから他人に興味を持たれる事がなかった私はどうしたらいいかわからず、その興味が大きくなるたび私にストレスを与えました。…でも、なんだか嬉しかった…」

原告「…」

被告「でも、でも…そのストレスから私は煙草を吸いました。そしたら肺ガンになってました。そいつのせいで私は肺ガンになりました。ははは。ありえねー。あー、なにやらどうにもよくわからない感情がどうにもよく分からなく私の中に渦巻いています。ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる…」

被告「…全部だ…僕は君の全部が好きだ…」

被告 自分の体を何度も殴る

シーン「原告の日常」

原告 お客さんにお金を配る

原告 時折咳き込みながら、暇を持て余し視線を様々なところに移す

原告 煙草を吸う

原告「あいつ、なにしてるんだろ…」

被告入り 何やらギターを練習している様子

被告「ボクが彼女を守るんだ…ボクはスーパーヒーローだ！」

シーン同時進行

被告 ひたすらギターを練習しながら曲を作っている

原告 窓の外を見たり、ドアを開けたりして原告のことを探す

原告 時折咳き込みながら、暇を持て余し視線を様々なところに移す

原告 被告のことが気になり、遂にスーパーへキュウリを買いに行く

原告 スーパーに着き、キュウリを手に取り辺りを見渡すが被告の姿はない

原告「なにしてんだろ…」

原告 キュウリを置いてそのまま帰る

原告 家に着き寝ころびながら煙草を吸う 咳き込む

原告「もうすぐかなあ。」

被告（齋藤まさる）「で、できた。…」

被告 彼女の家へ行き何度もインターホンを鳴らす

原告の頭には天使の輪が付いている

被告 ドアを突き破り 中に入る

被告 被告が寝ているのだと思い、優しく歌う

被告 徐々に彼女に近づき、作り上げた曲を唄う

被告 彼女の様子がおかしいことに気付く

被告「ボクは、ボクはスーパーヒーローなんだ…」

被告 荒々しく歌い始める

チャンチャン